平滑筋学会誌の編集に携わって

近畿大学名誉教授
砂野　哲

学会の演壇に立ってお話させていただくのは，もう4,5年ぶりということになります．おまけに，現役の頃，雑誌編集の後期ですが，小脳出血に見舞われ,「高血圧研究所の教授が高血圧による脳出血を起こした」といわれたものです．現在でもその後遺症のため歩行と多少の発声障害があります．特に言語障害では老人性のものも加わって，あまりうまく話せなくなってしまいました．本講演でも，お解かりになりにくいところもあるかと存じますが，お許しいただいてお付き合いをお願いいたします．はじめにお断りしておきたいと思いますが，これから使わせていただきますスライドは全て，現編集者の鈴木教授に作っていただいたものです．まず，鈴木教授に感謝いたしまして，話を始めさせていただきます．

私は1983年に近畿大学教授として赴任しましたが，その後数年経ってから，平滑筋学会設立メンバーの一人でもあり，当時の日本平滑筋学会誌の編集責任者として長年苦労して来られた東北大学の鈴木泰三教授（当時は東北労災病院の院長になられていました）から「日本平滑筋学会雑誌の編集をやってくれないか」というお話がありました．「しばらくは私が手伝うから」ということでしたので気持ちも軽くなり，とにかく編集をお引き受けすることになり，名古屋で開催された第30回総会（1988年）で正式に承認されました．

図1は日本平滑筋学会雑誌第1巻第1号で，鈴木泰三先生の御努力で昭和40年8月（1965.8）に刊行されたもので，表紙にあります目次からその内容がわかります．雑誌の印刷は従来通り仙台の笹氣出版印刷にお願いすることとし，雑誌の体裁も第1巻から続けてきたものを踏襲することにしました．

しかし，日本平滑筋学会雑誌の編集が容易でないことはすぐに思い知らされました．最大の難問は，原稿が全く集まらないことでした．つまり，原稿が投稿されないのです．投稿原稿がないことはrejectができないことを意味し，ひいては雑誌の質が上がらないことを意味します．加えて，1年間の発行回数が維持できなくなってきたのです．日本平滑筋学会雑誌に対しては「質が悪いから投稿しない」，「Impact Factorがないから投稿しない」などという声が強くありました．Impact Factorを獲得するためには雑誌の質を上げなければなりません．質を上げるためには投稿数を増やさなければなりません．投稿が無いから質が上がらない．質が上がらないから投稿しない．まさに「鶏と卵」の悪循環でした．「1年間か2年間だけ我慢して論文を投稿して貰えれば少しでも質を上げることが出来る」と総会のたびに訴えてきましたが，叶いませんでした．総会の度に，編集報告とともに日本平滑筋学会雑誌に論文投稿をお願いするのが慣わしとなり，次第に総会を迎えるのが苦痛になるほどでした．

論文投稿が少ないのは私に力が無いためである，と自分の能力の無さを思い知らされた毎日でしたが，編集責任者の役を引受けたからには，

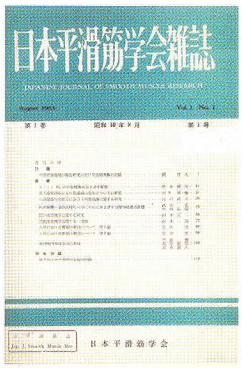

図1

無責任に放り出すわけにもいきませんでした．当時の日本平滑筋学会雑誌は和文原稿と英文原稿をどちらも受領し掲載していましたが，雑誌の質を上げ世界的に通用する内容にするためには英文論文を主体とする雑誌にする必要がありました．会員からも「雑誌を英文誌にすべきだ」という声が強くなって来ました．しかし，私はまだ心配でした．完全に英文誌にしてしまったら，それまでの和文投稿を失ってしまうので，ますます原稿数が減るのではないかと危惧し，完全英文誌とすることにはなかなか踏み切れませんでした．

数年かかって検討を重ね，また評議員会の強い意向もありまして，昭和62年（1987）から思い切って学会誌を英文にすることにしました．Journal of Smooth Muscle Research（JSMR）の誕生です．図2は当時のJournal of Smooth Muscle Researchの表紙ですが，現在のものと大差はありません．それまで使ってきた懐かしい緑地の表紙はこの年から新しいデザインに変わりました．英文誌の編集では，知り合いのnative speakerに頼んで編集委員になってもらい，refereeも務めてもらうことにしました．会誌を全部英文原稿のみにすることにはもちろん反対もありました．そこで，和文原稿は和文誌として別途扱うことにしました．和文誌の誌名はJournal of Smooth Muscle Research, Japanese Sectionにしました．図3がそのとき作成された和文誌の表紙で，これは現在まで引き継がれております．

これで雑誌の体裁だけは出来ましたが，論文投稿数は一向に増えませんでした．それどころか，逆に減少する結果になってしまいました．和文原稿の投稿が減るのはある程度覚悟していましたが，英文原稿の方も全く増えないのです．しかも，この頃は，藤井一元教授（広島学院大学）のお骨折りで，文部省（現文部科学省）から出版助成金を受けるようになっていたので，毎年決まった号数を発行しなければならない義務もありました．そのため，原稿数を確保することが最も大きな，しかも重要な業務でした．日本平滑筋学会雑誌は査読制度を採っていたのですが，必要論文数が集まらなかったので，投稿された論文は全部受理しなければならない状態でした．査読していただく先生方にはその旨を理解していただいて，誤りを修正していただくだけの査読というのが実情でした．このような状態では外国の査読者には怖くてなかなか頼めませんでした．初めから受理を前提として査読審査をお願いすることなど出来なかったのです．外国の某大物研究者からは「JSMRのrefereeになっているが，査読依頼が無い」と皮肉をいわれたこともありました．投稿された原稿を失うのが「怖くて依頼できなかった」のが実情でした．

編集の途中で，海外にある大手出版社から「JSMRは極めてユニークな雑誌で，ぜひ印刷と販売拡張をやらせて欲しい．英文チェックはうちの会社がする」という話が舞い込んだこともあり，話合いが続きましたが，最終的にその

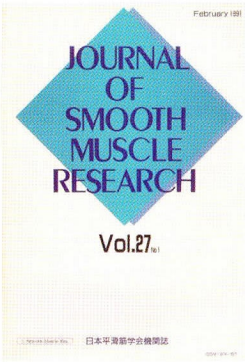

図2

図3

申し出に乗切れなかったのは，やはり投稿数の少なさでした．残念なのは，日本平滑筋学会がユニークな会であることは世界中の関係者が認めており，JSMR もユニークな雑誌であると言われながら，会員にそのことを理解して貰えなかったことでした．当時，会員の先生たちが少しだけ我慢して協力して下されば，こうした問題も乗り切れて，雑誌の質が上がるのにと思ったものです．

掲載論文が集まらず，致し方なく自分の研究室の論文を充てることも少なくありませんでした．若い教室員の不満そうな顔にも目を背けました．年間の刊行数を維持するためには致し方なかったのです．そうした苦しい状況のなかで編集業務を助けてくれたのは当時の島村佳一助教授（現北海道医療大学教授）でした．編集業務の後半には私自身が小脳出血で入院したときなどは，編集の実務は殆ど島村助教授が引き受けてくれ，私は口頭でいくつかのアドバイスをする程度といった状態でしたが，それでも何とか乗り切ることが出来ました．

編集業務にはかなり疲れ果て，2000 年 8 月からは予ねて期待していた若手，名古屋市立大学鈴木光教授に強引に頼み込んで編集を引き受けて頂く事にしました．鈴木先生は平滑筋の研究業績も多く，実力，実行力，国内外での，とくに外国のこの分野での知名度の高さなどが兼ね備わっているので日本平滑筋学会雑誌を何とかしていただけると信じていました．それと，かねてから親しくして頂いて，頼みやすかったこともあります．まさに私にとって至上の人物でした．

奇しくも，本誌の編集は仙台の鈴木先生から私を挟んで今度は名古屋の鈴木先生に移ったわけです．ただ，告白すれば，私が仙台の鈴木教授から依頼されたときと同様に，原稿集めに四苦八苦していたことも，会員からいろいろな苦情をうけたことも，かなり疲れていたことも，名古屋の鈴木先生には話しませんでした．「暫くは私が手伝う」といって，かなり強引に引き受けてもらったのも私の場合と似ていました．

図 4 は名古屋の鈴木先生が編集者になられてからの英文誌の表紙ですが，最初のものと変化しておりません．しかし中身は大きく違ってきました．大変な役目を引き受けてもらった名古屋の鈴木教授ですが，先生の優れた能力と努力で，結果的に現在の立派な雑誌が出来上がったのです．原稿の質も向上し，英文も鈴木先生の顔で native speaker の校閲，添削を受けて雑誌も内容的に立派なものになりました．ISI 社の Current Contents にはいまだ採用されていなく，Impact Factor もまだないということですが，多くのデータベース会社に採用され，いまや世界の平滑筋研究者が JSMR の論文を目にしているということが明らかになっています．実際，世界の研究者が JSMR の論文を download する数も増えていて，当然ながら，外国からの投稿も増えてきているようです．これらは全て編集委員長である鈴木先生と，編集委員の先生方の努力の賜物と敬服いたしております．

図 4

図 5

今となっては，出版を外国の出版社に任せる必要が無かったと思っております．

和文誌の方はJSMR（Japanese Section）として発足したことは先ほどお話ししましたが，最近になって，この和文誌の方は，出版の都合上，体裁はそのままで日本平滑筋学会雑誌，と改名されています（図5）．また和文誌の英名もNihon Heikatsukin Gakkaizassiとなりました．

このように，雑誌の内容は素晴らしいものになりましたが，相変わらず投稿数には苦労されておられるようです．ただ，鈴木教授は，投稿数が少ないことも，編集に苦労されていることも口にされず，いつも前向きです．本学会は実に良い編集者をもったことになります．

これまでお話してきましたように，私は雑誌を英文誌にした以外，これを大きく前進させることは出来ませんでしたが，新しく鈴木先生を選んだ点では褒めて頂いて良かろうかと思っています．JSMRが本当に良い雑誌になるには，原著論文の投稿数が増え，雑誌が厚くなること，rejectできる余裕ができて，内容的にも向上してくること，などが望まれます．これは私の夢でありましたが，その夢が実現しないうちに引退となり，学会でも名誉会員という有難いが淋しい名前を頂いている次第です．

鈴木教授のお陰で，雑誌は立派になりましたが，これをさらに盛り立て，世界に誇れる雑誌にしていただきたいと願っています．そのためには，「投稿数が増えて，編集に余裕ができること」がまず大切かと思います．素地は出来ています．そのためには，鈴木教授のお骨折りだけではなく，会員の先生方の協力が必要なのです．雑誌をますます発展，向上させるためにも，会員諸先生のご理解と，ご協力をお願いして，私の拙い，古い話を終わらせていただきます．